

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ ニュースレター 第2号

Threshold

～すれっしょんど～ (出発点)
神戸 薬物・アルコール依存リハビリテーションセンター

スレッシュホールドとは、新たな出発点、飛び立つ場所という意味です。



Drug Addiction Rehabilitation Center

DARC



Drug Addiction Rehabilitation Center

DARC



春がすぐそこまで来ました。

時の過ぎるのは早いもので、神戸に来て初めてのルミナリエや 1.17 震災の集いにも神戸ダルク一同で参加させていただきました。多くの機関の方々が訪問していただき、神戸ダルクを支えるお言葉をいただき、厳しい冬を乗り越えました。

今年に入り、神戸での連携や今後についてのお声掛けも少しずついただけるようになり、そんなお声掛けの一言一言が、いつもありがたくて胸の深いところが本当に熱くなる想いも与えてもらっています。

ようやく利用者さんにも笑顔が見られるようになったこの頃、私自身が感謝と喜びを感じながら接することの重要さも強く感じております。開設したばかりで大変なことも多い。そんな中で、支援してくれるお声掛けや、応援してくれる言葉を感じているからこそ、利用者さんにも暖かい支援ができていのだと実感しています。神戸ダルク ヴィレッジでは、春を待ちながら、「つくしはどこで取れるのか?」「春の野菜が献品で来ないかな?」「ようやく登山シーズン。今年こそ六甲山全山縦走だ!」「夏になったら、エアコンは設置してくれるのですかあ?」などなど、安心して、ゆっくりとした時間を共有し分かち合っています。

春を待ち、変化を感じるのも、私たちのプログラムの一つとを感じる今日一日です。

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ

自立訓練(生活訓練)神戸市障害福祉サービス事業所 デイセンター リカバリー

〒651-0068 兵庫県神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ 2F

TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741 E-mail kobe.darc@gmail.com

www.kobedarc.org

神戸ダルク

検索

薬物依存症者と向き合う

神戸ダルク ヴィレッジ

代表理事 精神保健福祉士 梅田靖規

「薬物依存症者」この言葉を聞いて、一般の方々はどういう印象を持つでしょうか？ また、回復できること、病気であること、頑張りたいと思っただけの方々も昔よりは増えてきました。が、その依存症者を自分の会社で雇ったり、近所付き合いしたりとなるとどうでしょうか？

まだまだ私たち依存症者、依存症からの回復者にとって社会でサバイブしていくには厳しい現状が目前に立ちまわっています。実際に社会での理解度が、回復率に直結するというのは間違いないです。むしろ、それに左右されてしまうものだと思います。回復率という言葉も変ですが。

当然、自分も含めて薬物依存症者は厄介です。手が焼けます。嫌われます。余裕でいなくなります。大声をあげる人もいます。ことごとく裏切り行為をします。あれだけ強く約束したのに、あれだけ信用して面倒見てあげたのに、そんな思いで、依存症者はもうこりこりと感じた人も、この読者の中にもいらっしゃると思います。

実際に、そうなのでしょうか？ 私たちはしばしば恐れ存在と思われることでしょうか。それには、依存症者に実際にあったことがない人でも、ひどい目に遭わされた人でなくても、マスコミの、特化した犯罪と薬物を絡めた報道であったり、一時予防での「人間やめませんか？」が懸え付けた恐怖から連想されるイメージが引き起こしている場合であったりがほとんどです。そんな態度をとられ依存症者は実際には、どんな心境になっているかという「深く傷ついている」状態で生き続けているのです。ひどいときにはその環境は、私たちから見える世界は、ほとんど酸素のない手入れされていない汚い金魚鉢の中で溺死の状態になっている金魚の死んでいる世界のような感じです。

依存症者は基本的に極端なまでに繊細で、傷つきやすく、臆病で自分に対して全く自信が持てない生き物なのです。これは、一般の方々への目に見えない私たちの本質です。社会の競争に敗れてしまったもの、人と上手に付き合いたくても付き合えなかったもの、愛し方も愛され方も経験したことがないもの、優しさが故に人に傷ついて心を閉ざしてしまったもの。そんな連中が、その社会の中で人に出会っていきなり薬物に出会っていき、一時的にその背負ったものから解放されるスベを知ってしまった。それが薬物依存症者の本質です。

当然、世の中にはもっと不幸で、もっと過酷な環境で強く立派に生きていく人もいます。私たちはそんな人々と比べられるのです。社会でいって負け組です。

負け組が生きて行くためには、背伸びをして、弱さを見せずに、そして自分の弱さを見ずに活動して行かなければなりません。また、私たちは、家族にも友人にも恋人にも会社にも裁判所にも「今度こそ頑張って絶対に同じ過ちを繰り返さないように生きていきます！」と誓わなければ、誓うことの裏切りをしなければならぬ状況で同じことを言ってきました。一番傷ついているのは自分自身なのだから、当然気持ちに嘘はありません。だけど、毎回それを裏切ってきてしまいました。ダルクにつながってくるときには、たいていの人がその繰り返しで、本当にスタボロになって現れるのです。

これは本当に本人だけの問題なののでしょうか？ 私は自分の経験を振り返っていつも思うのですが、あの状態までいったら本当にただ奇跡で生きていただけとしか思えない。というのが本音です。同じ思いを他の人にさせたいとも思わないくらい、深く暗い闇の中で、希望の光どころか、生きている意味さえわからなくなります。これは、実際に経験した人なら全員が共感することですが、経験しなければ「あの」感覚はわからないと思います。

ダルクで私たちが先人たちに教わってきたことは、その全く逆の生き方をダルクという環境の中で見つけられるということでした。それは、本当に自分自身の気持ちに正直に向き合っても許されるということです。その中で、だんだんと、薬物依存になったことで傷つけた人に対する思いなどの真意を知っていくのです。

病院でも刑務所でもこの腔に関わっても、薬物依存から解放されることができなかった人々が実際に薬物を愛用せずに立派に自分自身を愛し生きているのは、そんな、ずっと背負ってきた生き辛さを解放しあえる仲間が見つかったからで、実際に薬物をやめて幸せそうに生きている多くの仲間の姿を目の前にしたからです。

そう振り返ると、私はダルクに繋がるまで、本当に薬物をやめている人と出会ったことがなかったのを思い出します。苦痛と自己憐憫、自責の念と後悔の渦の中でずっともがいてきました。幸せになる権利のない人間だと自分を傷つけてきました。しかし、周りに対してはそんな気持ちを隠さず、平常を装ったり、ときには耐えられずに発狂して見たり、そんな行動も、全て恐さから生まれるものだと思います。

私はすべての人に全てを理解してもらおうとは思いませんが、これを読んだ人の数名でも、何か

理解してくれたら、薬物依存症者は変われるだろうし、本当の意味での一時予防になっていくと思っています。

私がこんなことを真剣に考えるようになったのも、安心して自分の弱さを話しても否定されることがない人々に支えられてきたこと、そして、経験の中で、フィリピンの貧困層地域で生活して自分自身をゆっくりと見つめる経験を与えられたからです。

そこには、貧しいけれど優しい風景がありました。便利なものなど何もありませんが、老人も子供も、自分の子供の頃の近所の風景と全く同じで、みんなが支えあっていました。障害のある方も非常に多かったのですが、それぞれができることをやり、他人も家族も同じように共存していました。私は、薬物依存を支援するために返したつもりが、私が霊的に失っていたものを学ぶことを与えられた気がします。

今の私たちは幸運かもしれませんが、ダルクの先人たちのように社会から完全に排除される中、自力で仲間を支えてきた人たちの足元に私は到底及びません。しかし、昔と同じく、私たちが社会でもう一度生きて行くには、障壁はあまり変わっていないのかもしれませんが、というよりも、昔よりも生きづらい世の中になっていると思います。

昔は覚せい剤＝暴力団、暴走族という構図は当たり前でしたが、今ダルクにつながってくる人たちは、昨日まで普通の家庭で普通に生活していたであろう面々なのです。もはや、薬物依存症は自分の家庭とは全く関係ない問題ではなくなっていることを理解して欲しいと思っています。

また、ダルクのことを少しずつ理解してくれている人によく言われます「仕事にならないことばかりに、どうして

時間を費やすことができるのか？」と。それは、私たちが本当に自分らしくありのままに生きる方法を先人たちにも同じようにしてもらっただけのことなのです。人として助け合って生きること、何の損得もなく与え、得られる喜びを見つけることができたからだと思っています。

私たちも、つながってばかりの依存症者には手を焼かされます。だけれども私たちは「自分も同じだったしな。これは病気がさせていること。この病気が良くなれば絶対によくなる」と確信しているから信じて待てるのです。

精神論のようにもなってしまうかもしれませんが、私たちがこれまで生きてきて失敗して、もう一度やり直すことができるためには私たちの力だけでは到底無理です。できるだけ多くの人に回復しようとしている仲間の姿と、実際に回復して人生に再挑戦している仲間の姿と話を聞きにきてください。

ある方が私に教えてくれました。「愛だけで薬物依存症を治すことはできない。だけれども最終的に愛以外のものでこの病気を治すことはできないんだよ」と。

仲間は今日も、今日一日精一杯生きること、ダルクの中で行なっています。なんどもつまづきます。けれど何度も支えあって今日を生きて行くことが本当の意味の自立だと教えられています。

仲間の経験と力と希望 さとちゃん

私は10年くらい薬物を使い続けました。

初めて使ったのは高校生の時、友人と一緒に大麻を吸い、遊び感覚で使ったのがきっかけでした。その当時、罪悪感や後悔はほとんど無く、いつでも止められると思っていました。

少しずつ使う量や頻度も増え、大麻以外にも覚せい剤やコカイン・MDMA・処方薬など、薬の種類も増えました。自分にとっては遊び感覚であった薬物が、薬物中心の人生に変わっていきようとしていました。薬物を手に入れたり、使うときに誰かに嘘をついたり、誰かを傷つけたりを繰り返していました。

使い続けて行くうちに、仕事や家族や恋人を失ったり、過剰摂取で何度も精神病院に救急搬送されたりしました。それでも薬物は止まりませんでした。

いつでもやめられると思っていた薬物だったのに、いつしか自分は薬物を使うために何も顧みることのできない人間になっていました。自分の力では、止めることができないとどこかで感じながらも現実と向き合うことができず、薬物を体に入れ、自分の死を予感しながら少しずつ自殺していました。

生きて行くことに希望を持てなかった自分は何度も自分の命を絶とうとしました。何度も失敗しました。措置入院することになった自分の元に、ある日ダルクのスタッフの方が精神病院に来てくれ、沖縄ダルクに繋がりました。

集団生活やミーティングは不正直で、一人でやめようとしていた自分には慣れないことでしたが、不思議と薬を使わずに穏やかな気持ちになりましたそれから10年がたち、今ではここ神戸の土地でスタッフとして仲間の手助けをしています。

この先、薬物を使わない保障は一切ありませんが、今日一日を仲間と一緒に楽しくやっていきたいと思っています。

回復の故郷として

神戸保護観察所 統括保護観察官(執筆時)

近畿地方更生保護委員会 統括審査官 泉 佳孝様

神戸ダルクヴィレッジにおかれましては、平素は更生保護事業に對しまして、格別のご理解、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、保護観察所に置いては、薬物使用は、犯罪であるとともに、薬物依存症という慢性疾患の病気であるという認識に立ち、究極的に医療、回復訓練施設、自助グループ等によって治療することなしには再使用防止はあり得ないと考えています。

これまで薬物事犯累犯者の仮釈放者について数ヶ月という短い期間が多かったのですが、系の一部執行猶予制度においては、初犯者のみならず、薬物事犯累犯者も対象としており、実刑終了後に続く、執行猶予期間部分において平均2年間の長い処遇期間を確保することになり、医療機関、回復訓練施設、自助グループ等の治療につなぐために、十分に処遇ができるようになりました。

保護観察所の役割は、保護観察対象者にスマーブ理論に基づく薬物再乱用防止プログラムを受講させるとともに、保護観察終了後に地域社会における医療、回復訓練施設、自助グループ等の治療・支援につなぐことです。

そのために、連携できる医療機関や支援団体の開拓に努めてきましたが、昨年8月に神戸ダルクヴィレッジが設立され、薬物依存のある保護観察対象者の紹介、保護観察所や保護司会の薬物研修の講師、薬物再乱用防止プログラムの実施補助者等、様々な面で御協力をいただき、兵庫県内の薬物施策が大きく躍進しました。

また、保護観察所のみならず、兵庫県精神保健福祉センターや神戸市こころの健康センター（現神戸市精神保健福祉センター）と連携し、地域社会の薬物依存症者治療支援に貢献されていると聞いています。

薬物依存症対策として、昨年、法務省と厚生労働省による「薬物依存のある刑務所出所者等の支援に関する地域連携ガイドライン」が施行されましたが、地域の医療機関、福祉機関、行政機関、回復訓練施設、自助グループ等が連携することが定められ、個別のケースのケア会議だけでなく、包括的ネットワーク形成のための連絡会議を開催することが求められています。無論、神戸ダルクヴィレッジはその貴重な構成メンバーとなります。

私は神戸出身です。神戸の地にダルクができたことは、神戸にとっては大きな社会的財産です。神戸ダルクヴィレッジの設立によって、多くの薬物依存で苦しむ人たちがその家族の運命を変え、救われることを信じています。

その意味においても、設立当初から連携を模索させていただいたことは非常に光栄に思っています。

私はこれまで、保護観察官として「責めること、疑うこと、見捨てること」ではなく、「許すこと、信じること、見捨てないこと」をモットーにやってきました。更生保護においては、一度の不義理や失敗で見捨てるのではなく、何度、裏切られても決して見捨てることがない姿勢が必要かと思っています。保護司さんにはそのような方がたくさんいます。薬物依存の人なんでも失敗を繰り返すことがあるかもしれません。わたしは薬物施策の仕事を通じて、ダルクやNAがいつでも「おかえり」と言えるような暖かい居場所としてあることを知りました。神戸ダルクヴィレッジが、兵庫県内の薬物依存の人たちにとって「回復の故郷」となることを願っています。

神戸ダルクプログラム 前回の続き～



リーズン (REASON) 認知行動療法プログラム

ダルクでの経験から学んだ回復を、認知行動療法などを応用してまとめたプログラム。薬物を使わなければならなかった理由がある私たちは、薬物を使わなくてもいい理由を学んでいきます。

エンカウンターグループ

言いつ放し聞きっぱなしだけでなく、問題を抱えた仲間を全員でサポートする、自分発見のプログラムです。トレーニングを受けたスタッフが主導し、チームワークを作ります。非常に効果的なプログラムの一つです。



レクリエーション

月2回、利用者が自分たちで計画を立てる、レクリエーション。ハイキングやBBQ、釣りやUSJ、銭湯など、薬物を使わない遊び・楽しみの経験を、たくさん重ねます。

社会復帰トライアル

薬物を使わずに、生きがいを持って生きることが、薬物依存症者の社会復帰です。ダルクを卒業して、いきなり仕事を始めることに不安もあるでしょう。

ダルクでは仕事以外にも、学校、就労訓練、ボランティア活動など、ゆっくりと色々なことに挑戦していきます。失敗しても大丈夫な環境で自信を養います。



食事作り

毎日の食事を工夫してみんなで準備して作ります。正直ダルクで食事作りができるようになる人は非常に多く、社会復帰した時に一番に役立つのが、食事作りかもしれません。料理のできる男はモテる！（スタッフ談）



2016 神戸新聞 2016年10月10日(日) 第10000号

心のすき間 埋めるのは薬物じゃないんだよ

【神戸新聞】「心のすき間を埋めるのは薬物じゃないんだよ」と、神戸市東灘区にある「神戸ダルク」のスタッフが、利用者に対して語りかける。この言葉は、利用者にとって、心のすき間を埋めるためのヒントになる。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。

授かった希望 君にも



【神戸新聞】「授かった希望 君にも」と、神戸市東灘区にある「神戸ダルク」のスタッフが、利用者に対して語りかける。この言葉は、利用者にとって、心のすき間を埋めるためのヒントになる。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。



【神戸新聞】「薬物依存のりハビリ施設 神戸ダルク」発足。市内唯一の支援拠点として、協力をしながら人生再出発を支援する。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。

2016 神戸新聞 2016年10月10日(日) 第10000号

入寮型サービス 年明けから開始

【神戸新聞】「入寮型サービス 年明けから開始」と、神戸市東灘区にある「神戸ダルク」のスタッフが、利用者に対して語りかける。この言葉は、利用者にとって、心のすき間を埋めるためのヒントになる。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。



【神戸新聞】「入寮型サービス 年明けから開始」と、神戸市東灘区にある「神戸ダルク」のスタッフが、利用者に対して語りかける。この言葉は、利用者にとって、心のすき間を埋めるためのヒントになる。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。

↑毎日新聞 産経新聞↑

↓神戸新聞 読売新聞↓

薬物依存 克服の力に



【神戸新聞】「薬物依存 克服の力に」と、神戸市東灘区にある「神戸ダルク」のスタッフが、利用者に対して語りかける。この言葉は、利用者にとって、心のすき間を埋めるためのヒントになる。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。

体験語り合いや食改善

【神戸新聞】「体験語り合いや食改善」と、神戸市東灘区にある「神戸ダルク」のスタッフが、利用者に対して語りかける。この言葉は、利用者にとって、心のすき間を埋めるためのヒントになる。神戸ダルクは、薬物依存症の回復を支援する施設で、利用者に対して、心のすき間を埋めるためのヒントを提供している。

神戸

KOBE

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

神戸新聞

活動報告

7月 2016

一般社団法人としてスタート

8月

神戸ダルク ヴィレッジを開設

9月

北海道 NA コンベンション参加

ラジオ関西生出演

10月

福岡ダルクフォーラム参加

兵庫セルフヘルプネット会議参加

ASW 協会全国大会参加

11月

JCCA 宇都宮参加

フードバンク関西さんからの支援開始



12月

香川ダルクフォーラム参加

外務省との打ち合わせ アバリ

1月 2017

ダルク拡張のために引っ越し(物件の拡張)

2月

自立訓練(生活訓練)事業所 デイセンターリカバリー開所

ナイトケアサービス(夜間系)開始

3月

神戸保護観察所講演

神戸市言語司会寄り添い講演

西宮保護司会講演

芦屋市保護司会講演



神戸ダルクの展望

ようやく、神戸ダルク ヴィレッジの存在も少しずつ理解され始め、いろいろな機関の方々に訪問していただき、応援の言葉をもらえるようになりました。

2017年は、これまで支援していただいた機関の方々との繋がりを深め、「神戸ダルク支援会」及び「神戸ダルク家族会」をスタートさせ、地域に対しても、理解を深めるための啓発活動を進めていきます。

ダルクの利用者、スタッフにも、快適で安心できる環境を提供できるようにグループホームの物件探しもしている現状です。また、地域の精神保健福祉士になったばかりの面々と共に地域の問題とつながりの架け橋となる「子ども食堂」事業にも協力していきます。これは、食料で支援していただいているフードバンク関西さんが発起した「兵庫子ども食堂ネットワーク」の協力によって動き始めました。

そして一番に、利用者が地域に戻っていけるような、毎日のダルクプログラムを仲間とともに楽しみたいと思います。興味のある方は是非協力してください。よろしくお願いいたします。

電話相談 来所による面談 メール相談

薬物に関するどんな問題でも相談できるところとして、メールや電話での相談窓口を開設いたしました。

夜間電話相談として、毎週火曜・木曜は22時まで、電話相談もお待ちしております。

なかなかダルクまで行くのはまだまだ難しいが、話を聞いてもらいた。自分が依存症なのか確認したい。どうすれば家族が薬物問題から解放されるのか。とにかくどうしていいかわからない。どんなことでも相談することから始まります。薬物の斡旋や使用方法、購入方法などの相談は行っておりません。

また、本人、または家族、関係者からの薬物問題に関する相談及び、講演などに関する依頼なども下記の時間内にて受け付けております。気軽にご連絡ください。なお、相談の内容に関する秘密は厳守します。警察や他機関への通報や記録の漏洩などは一切ありませんので安心してご連絡ください。

逮捕・勾留中の方々への支援

刑務所・拘留所・留置所への面会、手紙などによる逮捕者及び保釈中の方々の裁判での情状証人出廷や、刑務所出所者への薬物からの回復を希望する方の引受人としての指導対応や、出所前面談など、他機関と連携しながら対応しています。また、資料請求などもご連絡いただければ対応いたします。

メールでの相談事業・夜間電話相談事業は、
毎日新聞大阪社会事業団様の助成金によって運営されています。

★月曜～金曜 10:00～17:00 ☎078-224-4244

★毎週火曜・木曜 18:00～22:00 (電話相談のみ)

メールは24時間 OK。 kobe.darc@gmail.com

神戸ダルク ヴィレッジ広報誌「Threshold」 年間購読のお願い

このニュースレターはNHK歳末助け合い義援金によって発行されています。本来ならば、低料第三种郵便を取得し、安価にて、みなさまに定期的にお送りしたいのですが、制度が変わり400名以上の定期購読者がいなければ利用することができなくなりました。ですので、年間購読費は年6回発行で2000円になります。お申し込みはFAX、電話、メール、または同封の振込用紙にてお願いいたします。お申し込みの際は「住所・氏名・電話番号」を必ず明記ください。

※ 配布用に、当ニュースレターを置いていただける場合はご連絡ください。たくさんの方に読んでいただけるように希望数を郵送いたします。私自身もこのような広報資料を見つけたことがきっかけで回復の場所を見つけることができました。ぜひ、まだ苦しむ依存症者の助けとなるようにご協力ください。

支援会員のお願い

神戸ダルク ヴィレッジでは、支援会員として、活動を支えてくれる方を募集しています。

兵庫県の薬物依存症者を助ける活動をご支援ください。

個人会員は1口 1万円からになります。ご連絡をお待ちしています。

神戸ダルク ヴィレッジ TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741 E-mail: kobe.darc@gmail.com



NHK 歳末助け合い運動のご協力に心より感謝いたします。

2回にわたる、このニュースレターの発行及び、神戸ダルクヴィレッジパンフレット作成を支えてくださった、NHK神戸放送局、ならびに兵庫県共同募金会に心より感謝を申し上げます。神戸ダルク ヴィレッジが開設して初めての助成金を年末に受け取った時は、今までにないほどの感謝を感じたのを今でも思い出します。この度の助成金配分式にも招いていただいて、NHK神戸放送局長谷川局長より、暖かいお言葉と配分金をいただくことができました。兵庫県共同募金会のある、兵庫県社会福祉協議会は神戸ダルク ヴィレッジからも歩いていける場所にあり、申し込みに行った際も、担当の方から、非常に勇気付けられる応援のお言葉をいただき、この度はその配分金を地域で苦しむ依存症者とその家族、関係者のための資料作りに十二分に活用することができたと思います。この会報誌やパンフレットを手にした方が、希望ある人生の出発点への地図とすることができるとを祈り、神戸ダルク ヴィレッジとしても全身全霊、神戸の街で活動していきたいと思っております。私たちの活動によってこの感謝をお伝えしたいと思っております。

本当にどうも
ありがとうございました。



1次配分式の様子 NHK 神戸放送局にて

神戸ダルクへのご献金・献品のご支援本当にありがとうございました。

開設から今日までをたくさんの方々に支えられてきたおかげで、仲間一同、回復のプログラムに取り組むことができています。心より感謝いたします。これからも暖かく見守ってください。

ご献金

沖縄ダルク 森廣樹様 リカバリーハウス・おりーぶ 山本良子様 伊東五子様 山本恵様
曾根義雄様 信親 園田親臣様

ご献品

京都ダルク様 永田圭一様 富田安世様 田中千佳様 川西悦子様
(平成 29 年 1 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日到着分・順不同)

助けてください。緊急支援のお願い 献金・献品をお願いいたします。

毎回のお願いで非常に心苦しく思いますが、神戸ダルクでは生活用品などが不足しております。ご寄付及び、ご家庭で余っている日用品・食料品の献品をお待ちしています。本当に厳しい状況で、皆様からの支援でなんとか成り立っており、依存症者の回復の場所を絶やさないようにしたいと考えていますので、何卒ご支援のほどよろしくお願いします。ご家庭で余っている食料品(米、野菜、乾物、味噌、醤油、インスタントラーメンなど)から、洗濯洗剤やシャンプー、石鹸、また自転車や毛布などがございましたら、神戸ダルクまでご献品ください。

また、神戸において施設が立ち上がったばかりで、相談業務に明け暮れる日々の中、運営資金も非常に苦しい状況です。本当にお恥ずかしいのですが、このままでは年末まで施設維持ができるかわからない状況です。みなさま、本当に助けてください。よろしくお願いいたします。

ご寄付振込先口座 ゆうちょ銀行

口座番号 00950-9-275937

口座名 シヤ) コウベダルクヴィレッジ

店番 〇九九 0275937

献品の送り先住所 651-0068 神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ2F

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ

編集後記

NHK 歳末助け合い義援金のおかげで、2 回にわたって、ニュースレターを発行することができました。感謝するばかりです。今後も継続してニュースレターを発行していくには、定期購読会員様が増えるしかありません。私たちの回復を見守ってくださる方々へ私たちの活動を知ってもらいたいため、ぜひ年間購読の方、よろしくお願いいたします。また、ウェブサイトでも確認することができます。

神戸ダルク ニュースレター Threshold (出発点) 第 2 号

編集 一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ 梅田靖規

印刷 プリントバック

〒651-0068 兵庫県神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ 2F

TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741

E-mail kobe.darc@gmail.com

www.kobedarc.org

価格 1 部 100 円 年会費 2000 円 (購読料は年会費に入ります)

※ 年間購読については 7 ページをご覧ください。

※ 今回、販売代金はいただいております。



この広報誌は NHK 歳末助け合い義援金により発行しています